

伝道ブックス 81

ほうおん
報恩の生活

海
法龍

目次

■一年でもっとも大切な御仏事	1
■親鸞聖人のご法事	4
■言葉に出遇う	7
■「南無阿弥陀仏」に聞く	12
■名には願いがあ	15
■「ありのまま」と「あるがまま」	21
■原点を見失っている	25
■はかなき身の事実	30
■人生がぼやける	36
■浮生 <small>ふじょう</small> なる相	42
■煩惱の身	45
■人間の発想	50
■平等への目覚め	54
■報恩の生活	60
あとがき	68

【凡例】

本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

■一年でもっとも大切な御仏事

真宗のお寺は報恩講ほうおんこうをお勤めいたします。報恩講は本堂で勤まりますので、私たちはつい本堂でのお勤めだけが報恩講だと思ってしまうがちです。しかし、実はさまざま準備から報恩講は始まっているのです。

たくさんの方々にお手伝いをいただきながら、おみがきなど多くの準備を行い、報恩講をお迎えするわけですが、それはやはり住職・坊守・寺族だけの力ではあることではありません。多くの先輩方が報恩講を勤めるために、僧侶と門徒がみんなで協力し合って準備を行ってきた伝統歴史があるからこそ、お迎えすることができるのです。

また、みんなと一緒に勤めできるのも、やはり先輩たちが一緒にお

勤めをしてきたからできるのです。僧侶だけでお勤めをすれば、それが当たり前になつて一緒にお勤めすることはなかったでしょう。報恩講は僧侶が主役ではないのです。関わる一人ひとりが主役なのです。

つまり、私たちの先輩方が、また親たちがこの報恩講を本当に大事に思い、有縁の人たちと準備もお勤めもご法話もお齋ときも、すべてを分かち合いながら、一緒にお勤めをしてきた伝統があるのです。それは疎わづらかにしなかった、いや疎かにできなかつたということです。それほど大切に勤められてきたのです。

例えば、お莊しょうこん嚴げんの仏花ぶつかは、通常、ご本尊ほんぞんに向かつて左側にのみ立てられますが、報恩講の時には、左右二つになります。また打敷うちしきも掛けます

し、お華け東とうといつてお餅のお飾りもします。それだけ手間と時間をかけてお迎えするのです。

一年三六五日。この報恩講のために一年間があると言っても過言ではありません。真宗門徒の一年は、報恩講に始まり報恩講に終わる、そしてまた報恩講から始まつていく。それほど生活の中で、重い意味をもつてきた御仏事が報恩講なのです。

今はどうでしょうか。私たちの真宗のお寺で勤められている報恩講が本当に報恩講という意味をもち得ているのか。残念ながらそういう問いをもたなければならぬ現実があるのではないのでしょうか。しかし、そういう問いさえもなくなった時、真宗のお寺は真宗寺院としての生命を

失うのでしょうか。真宗寺院に本来の意味の活気が生まれ、熱のあるお寺になっていく道は、報恩講という仏事の回復にしかありません。それが必要ならば、真宗寺院は真宗の本来性を失い、世俗の価値観の中に埋没まいぼつしてしまいます。それこそ忘恩講ぼうあんこうと言ってもいいのではないのでしょうか。

■親鸞聖人のご法事

真宗の寺院は親鸞聖人のお寺です。親鸞聖人の教えを受けてきた方々が、念仏の道場としてお寺を建立してこられました。その伝統の中で親鸞聖人の報恩講が勤められ、相続されているのです。親鸞聖人の九十年のご生涯を忘れてはならないと、先輩方は強く思われ、親鸞聖人を偲しのんで

勤められてきたのです。ですから、報恩講は親鸞聖人のご法事なので、毎年毎年お勤めし、親鸞聖人を憶おもい起こすのです。

私たちは、身近な方が亡くなって、ご法事をお勤めしますが、それも同じように、亡くなった方のことを憶い起こすことになります。その人がどのように生きられたのか。その人と私はどういつながりをもっていったのか。その人の人生から私は何を学んできたのか、また学んでいくのか。亡き人を憶い起こしながら、そういう問いをいただくのが、ご法事の大切な意味なのです。

もう少し言うならば、亡き人の姿から、その人生から、考えさせられるのです。私たちは限られたいのちを生きています。その限られたいのち

ちを、これまでどう生きてきて、これからどう生きていくのか。今ここに生きていることにどんな意味があるのか。死からの問いかけです。ここにすべての人に共通する、人生の根源的な課題があるのです。

しかし、忙しい普段の生活の中では、自分を見つめることがなかなかできません。そういう中であって立ち止まって自らを省みる、自分自身のこと憶い起こされてくる、そのご縁がご法事なのでしょう。報恩講もそうなのです。

毎年毎年、立ち止まり、親鸞聖人を憶念おくねんする。親鸞聖人のご生涯を憶い起こし、そのことをとおして、親鸞聖人の教えを聴聞ちようもんし、あらためて憶念せしめられ、その教えに報い、応える。そしてその教えにふれさせ

ていただいたご恩を深く感ずる。それは言い換えれば、親鸞聖人に出遇えてよかったということでしょう。

■言葉に出遇う

親鸞聖人に出遇うことは、親鸞聖人が出遇われた「南無阿弥陀仏」の精神に出遇うことです。

親鸞聖人も法然上人ほうねんしやうじんに出遇わなければ、お釈迦さましやくかが説かれた教えに出遇えなかったのです。ですから法然上人に対して非常に深い尊敬の念を抱いておられました。

しかし、法然上人に出会っても、法然上人が、何もおっしゃられなか